

ファシズムの文学的位相

——ブラジヤック『七彩』を手がかりにして——

深澤民司

はじめに

I ブラジヤックとその時代

II 青春とファシズム

III 青春と永劫回帰

おわりに

はじめに

第二次世界大戦が終わり、イタリアのファシズムやドイツのナチズムが崩壊してから70年以上がたった。しかし、ファシズムという言葉は今日の政治でも使われている。最近では、2016年アメリカ大統領選挙で共和党のドナルド・トランプが立候補を表明した後、彼の言動をめぐって、批判的な立場にたつ論者がファシズムやファシストという語を使って懸念を示した。そうした意見の数は決して少なくはない。それにとどまらず、学術的な面でも彼がファシストかどうかの分析と検討が行われた。ヨーロッパでは、とくに中東からの難民の増加にともなって急速に台頭した極右勢力に対して、そして中南米では独裁政権に対して、そうした語を使った批判や分析が行われている。

しかし、そもそもファシズムとは何であろうか。ロジャー・グリフィンが言うように研究者のなかで1990年代までにある程度の合意ができたとしても、それは部分的なものにとどまるし、それが人口に膾炙することなどまったくない。それにもかかわらず、今日でも独裁や暴力がみられるところではその語が使われ続けている。なぜだろう。敵対者を完全に否定し、その残虐さをアピールするという意味では、テロリズムと同じほどの衝撃力をもつことは確かであり、その意味で使われているという見方

は間違っていない。双方とも暴力に訴え、それが引き起こす恐怖心を利用する点で似ており、今日、その2つはもっとも忌避される言葉であろう。だが、テロリズムがさまざまな過激集団が利用する政治的手法であるのに対し、ファシズムは一定の政治原理であり、根本に理念をもっている。ここで理念と呼んでいるものは、社会状況や階級的利害などによって構成されてイデオロギーとなる前の本源的な主観のことである。ファシズムの理念的特徴は近代以降の世界を構成する中心的理念に敵対することにある。われわれがそれを恐れるのは、その暴力がテロリズムと同じく人身に危害を加え不安を煽ることに加え、秩序を根底から覆すだけの破壊的可能性をもっているからである。ファシズムが文学として表現されるのは、何よりもこの点においてである。本稿はそれを理解するための手がかりとして、フランスのファシスト、ロベール・ブラジヤックの著書とも言うべき小説『七彩』を取り上げ、そこから彼のファシズム思想を読み解こうとする試みである。

ファシズム思想という点、今日でも違和感を覚える人は多い。ファシズムが台頭した時代から、ファシストは往々にして常軌を逸した精神的異常者や狂人として扱われた。そうした面が見られることは確かだったとしても、それすらも含めてファシズムがある一定の知的脈絡のなかで生起したと考えるべきというのが、今日のファシズム研究では主流になっている。たとえば、フランス・ファシズムの場合、「大地と死者」の教義を掲げてフランス・ナショナリズムを国粹型に転回させ、ファシズムの原点とも称されることのあるモーリス・バレスは、下院議員であると同時に、フランス学士院最古のアカデミー、アカデミー・フランセーズの会員にもなった大文学者である。また、第一次世界大戦前にフランスで最大の極右団体を結成し、ヴィシー政権時には、そのイデオログとなったシャルル・モーラスにしても、古典主義文学の大家と評されている。ちなみに、後述するように、ブラジヤックにもっとも深い影響を及ぼしたのはモーラスであった。ブラジヤックと同時代のファシストの作家をみても、1世代上の復員軍人の世代に入るが、ルイ＝フェルディナン・セリーヌやピエール・ドリュ・ラ・ロシエルは、今でも愛読者が尽きないほどの人気を博している。彼らには狂気があったが、それも時代の知的な難しさとファシズムそのものもつ理念的特徴のなかで理解すべきである。

もっとも、知的とはいえ、ファシズムに自由主義のような普遍的原理に基づく理論体系を求めても無駄であろう。近代以降の世界を動かす原理となった自由主義、民主主義、資本主義、社会主義、共産主義はすべて、個々の人間がもつ理性に依拠するとい

う意味で合理主義に基づく。議会政治や市場経済といったシステムは、そうした合理主義的原理に基づいて作動する。ファシズムが敵対したのはこの近代的な原理である。ファシストは個人に代わる共同体、理性に代わる本能や直感を主張し、カリスマ的指導者が体現する共同体との一体感に生の実現を感じた。堀田新五郎氏の言い方を借りれば、合理性に神の名を冠した近代世界において、市場や議会といったlogosに媒介されたシステムがダウンするとき、logosの媒介を拒否し、カリスマ的指導者に無媒介に結合したのがファシズムである。

このように考えれば、ファシズムにおける文学の意義が明らかになる。近代世界において原理の主体は個人であり、個人は理性的な決定主体として設定される。それがすべてなら、主体の説明は論理性を規準とした理論だけで事足りる。しかし、実際にはさまざまな欲望や感情にまみれ、葛藤し、悩み、苦しむ決定主体である。だから文学でしかうまく表現できない世界が存在する。それは政治の世界においても同じである。近代以降の人々は個人の自由や平等を信じ、それを理性的に実現することに賭けてきた。それが虚構であり、実際は嘘にまみれたものであるとしても、だ。ファシズムはこのような近代社会のなかから、それを前提として現れた。したがって、近代の原理を否定し、共同体や感性を称揚するとしても、出発点は個人の営みにしかない。そうでなければただの保守反動であり、あれほどに大衆に訴えかける力をもてなかったはずだ。その出発点に焦点を合わせるとき、文学がもっとも豊かに描ける領域が現れる。ブラジャックの『七彩』には、まさにそのような領域が書かれている。『七彩』の読解に取り組む前に、まずはその前提となるブラジャックに関する研究、彼の人生と時代背景などについて簡単に触れておきたい。

I ブラジャックとその時代

ブラジャックは35年10か月という短い人生だったにもかかわらず、かなりの数の作品を残している。それは極めて多岐にわたり、小説以外に、演劇・文学・時事問題に関する評論、詩、古代詩集編纂書、歴史書、評伝、さらには回想録も残している。1964年には12巻の全集が親友の文学者モーリス・バルデッシュにより編集されている。ブラジャックに関する研究書はかなりある。日本では、1972年に三保元氏が書いた「あるファシストの誕生」が最初であろう。その後、1989年に福田和也氏が『奇妙な廃墟』を出版し、アルチュール・ド・ゴビノー以降の反近代主義の系譜を辿るなかで、ブラ

ジャックに1章を充て、その人生と作品を極めて鋭利な筆致で解析している。ブラジヤックの3冊の訳書では、訳者の高井道夫氏と池部雅英氏がブラジヤックの経歴と作品について解説をしている。それ以外だと、有田英也氏がフランスの典型的なファシストとも称されるドリュ・ラ・ロシエルに関する大部の研究書のなかで、ブラジヤックに何か所にもわたって言及している。ドリュとの比較に関しては、松浦寛氏も論じている。南祐三氏は、敗戦後のフランスでもっとも過激なファシスト週刊誌であった『ジュ・スイ・バルトゥ』を研究するなかで、その編集長を務めたブラジヤックの行動と思想を考察している。

ブラジヤックの人生については、ブラジヤック自身が1939年にナチス・ドイツの侵攻に備えてマジノ線に配備され、「奇妙な戦争」が続く間に書いた『われらの戦前』が多くを教えてくれる。この書では、ブラジヤックが1925年11月23日にルイ・ル・グラン高校のエコール・ノルマル・シューペリユール受験準備学級に入学するためにパリに来た時から、1939年8月末に出征するまでの間の出来事が、その困難な時代に生きた彼とその周りの友人を中心に書かれている。ただし、それ以前の人生についてはあまり語っていない。その書とこれまでに出版された研究書を参考にして、ブラジヤックの生い立ちからみてみたい。

ブラジヤックは1909年3月31日、地中海に面したスペインとの国境近くの町ペルピニャンで生まれた。そこは母の実家がある場所であり、3年後に軍人の父が勤務するモロッコに渡っている。父は第一次世界大戦の緒戦で戦死し、その後母の実家に戻っている。生まれてから幼児期まで、ブラジヤックは地中海に面したところで育った。彼のアイデンティティの原風景を形づくっているのは、このとき目にした眩しい陽光のもとに溶け合う空と海の青さである。地中海がもたらす甘美な忘我のもとで感じた幼年期の「幸福」は、後に彼の存在の根拠とみなされることになる。福田氏の言では、その陽光は「つねにレトロスペクティヴな心性をうみだし恍惚とともに失われたものへの強い希求を喚起することで世界との親和をもたらす力」となった。ブラジヤックが8歳のときに母が医者と再婚し、初めて地中海を離れ、パリの南東にある地方の町サンスに移り住んだ。そのリセでは孤独のなか読書と詩作に没頭する生活を送っていた。1925年16歳のときルイ・ル・グラン高校に入学する。パリでブラジヤックが出会ったのは絢爛たる文化と後に名を成すことになる多くの友人であった。かろうじて平和が保たれている状態だったとはいえ、好奇心をかきたてる新奇なものは若者を知的冒険に誘った。ブラジヤックは仲間とともにさまざまな芸術を堪能し、夏休みにな

ると幼児期を思い出すかのように、太陽が輝く青い海に行って戯れた。「生きる喜び」に充ちた「青春」の3年間であり、それは幼年期とともに「幸福」の時期として記憶された。

1928年ブラジヤックはエコール・ノルマルの入学試験に合格する。その受験準備や仲間との冒険に忙しかったとはいえ、高校のときから評論活動を始めており、この段階でフランスの極右政治団体アクション・フランセーズに魅了され、その総裁であるシャルル・モーラスの政治哲学に心酔していた。モーラスもまた、地中海にほど近いプロヴァンス地方にあるマルティグという町で生まれ、その海の美しさに惹かれて思想形成した人物である。モーラスは合理主義的な君主主義者として有名だが、その合理主義とは古代ギリシア・ローマに見出される美的秩序をかたちづくる理性に従うことであり、近代的な合理主義とは異なる。モーラスはその理性の伝統を受け継ぐものこそフランスの君主政であるという論理から、君主主義的なナショナリズムを唱えていた。ブラジヤックは1929年に『ウェルギリウスの存在』の執筆に取りかかっているが、処女作に古代ローマの詩人の伝記を選んだことにはモーラスの影響があったと思われる。モーラスの反ドイツ感情もまた、第一次世界大戦で父をなくしたブラジヤックにとって自然に受け入れられるものだったろう。1930年にブラジヤックはアクション・フランセーズが発行する『フランス学生』誌の編集に参加するようになり、1931年には『アクション・フランセーズ』紙の文芸欄を担当するようになる。同じ頃に刊行された『ウェルギリウスの存在』は好評を博し、それもあって右翼系のさまざまな雑誌にも寄稿するようになる。かくしてブラジヤックは華々しくデビューしたが、アクション・フランセーズの街頭行動には参加しておらず、文芸活動に没頭していた。福田氏が言うように、22歳のブラジヤックには高校に始まる「青春」がまだまだ続いていた。

演劇、無声映画、現代美術、カフェ、キャバレー、シャンソンなど、1920年代後半から1930年代初めのパリは当時のヨーロッパでは最先端の文化が花開いていた。もっともその底流には、資本主義的物質主義を代表するアメリカと共産主義のソ連の台頭により、ヨーロッパ文明が没落するという危機感があり、その不安が若者を何かしらの焦燥や過激な言動に駆り立てる傾向にあった。たとえば、ブラジヤックより1歳年上で同じエコール・ノルマルで学び、後に共産党で活躍し1940年に戦死したポール・ニザンは、日本でも根強い人気のある作家だが、彼が1931年に出版した『アデン・アラビア』は、「ぼくは20歳だった。それがひとの人生でいちばん美しい年齢だなどだれにも言わせまい」という言葉から始まっている。ブラジヤックとはすべての点で正反対

のようだが、ブラジャックにしても謳歌した「青春」の根底に時代の危機感があり、その息苦しさが「青春」の甘美さをよけい際立たせたとと言える。1932年にブラジャックはエコール・ノルマルを卒業し、その年の11月から翌年の9月までリヨンで兵役に就いた。その後、本格的に文学的ジャーナリストとしての仕事を始める。これまで書いてきた『アクション・フランセーズ』紙など以外に、右翼の実力者アンリ・マシスが編集長を務めた『1933年』誌や『ルヴュ・ユニヴェルセル』誌でも定期的に執筆するようになり、時事問題も論じるようになっていた。とはいえ、この時期でもブラジャックは目立った政治行動をとることはなかった。それが1934年パリ騒擾事件を体験することにより、紙上を通してであれ、積極的な政治的関与に転換するようになる。

1931年頃から大恐慌の影響が出始めたフランスでは、次々に内閣が代わる政情不安に陥り、1933年から議会不信が広がるとともに政治が左右とも過激化し、共産主義や社会主義を奉じる政党や極右ナショナリズムやファシズムを唱える政党が支持を拡大していた。そこで起こったのがスタヴィスキー事件だった。これはバイヨンヌ市に設立された銀行が行った詐欺に、急進党員の植民地相が係わっていたとの疑いが持ち上がった事件である。銀行の設立者であるスタヴィスキーが1934年1月にスイスで遺体で発見されるとともに、左派内閣や議会主義を糾弾する極右団体を中心とするデモが激化し、2月6日に国会前で暴動が起こった。この暴動では15名以上の死者と2,300名以上の負傷者が出た。翌日ダラディエ内閣は総辞職し、右派閣僚を含むドゥメルグ内閣が成立したが、今度はそれに左翼が反発した。組閣した2月9日に共産党がデモを行って警官隊と衝突し、2月12日には労働総同盟や社会党も加わって450万人の労働者を動員するゼネストを決行した。

このように過激に転換する現実を前にして自らの政治的立場を鮮明にすることは、ブラジャックに限らず、その時代の若者にとって必然であった。高みから見物するわけにはいかなくなっていた。この事件をきっかけとして、ブラジャックは政治行動を主眼におき、それを喚起する文を書いていくことになる。そうした自覚と同時に、民衆のエネルギーの高揚に生の力の爆発、ブラジャックの言葉では「青春」の自己表現を見出したことも、これ以降の活動にとって大きな意義をもつものだった。それはファシズムの革命に導く力だった。だがそれは、モーラスの薫陶を受けたブラジャックにとって、ナショナリズムと一致するものではなかったはずだ。

パリ騒擾事件の後、ブラジャックはいくつかの雑誌の編集の仕事に就き、1935年頃から週刊誌『ジュ・スイ・パルトゥ』の編集に携わるようになる。ブラジャックは活

動の拠点をそこにおき、1937年春に編集長になる。当時の『ジュ・スイ・パルトゥ』誌の方針は対独宥和による戦争回避である。この時期のブラジヤックは、ジャーナリストとして相変わらず旺盛な執筆活動を続けるだけでなく、小説も書いている。1938年9月に動員令が出されたが、9月29・30日のミュンヘン会談で戦争は回避される。ブラジヤックはそれに賛同する立場だったが、彼を含め人々は戦争は不可避と観念していた。1939年8月22日、妹シュザンヌ、彼女と結婚した親友のバルデッシュとともにいったスペイン旅行から帰ったその日に、ブラジヤックは動員令が発令されたことを知る。そして8月28日にはアルザス地方のマジノ線近くにあるインヴィレールに到着する。9月3日に英仏はドイツに宣戦布告をするが「奇妙な戦争」が続く。『七彩』は、このように戦争に向けて状況が切迫する1939年に書かれ、その年の10月に出版された。

II 青春とファシズム

ブラジヤックは『七彩』の枕詞のなかで、小説の技術について、物語、日記、書簡、詩、対話などさまざまな形式の自在さがあることに注目する。そして通常、こうした形式が同一の作品のなかで混じり合っていることを指摘したうえで、これらの要素を切り離し、個々のエピソードを叙述するために、それに適合した形式を使うことが「過ぎ行く時の流れにマッチする」と述べる。異なる形式がそれぞれの時点でのエピソードをもっともうまく描くとしても、時系列的な順にそってこのような書き方をするだけなら、話がばらばらになって全体の調和がなくなる懸念がある。この作品は確かに時間軸にそって展開するが、そのような印象を与えないのは、作品全体を通して焦点が最初に提示した物語に定まっているからであろう。また、個々のエピソードのなかで、以前のエピソードをより詳しく話すという箇所が随所にみられるのも、そうした過去の焦点に繰り返し立ち返る効果をもたらしている。

「第一章・物語」では、まさにその焦点となる「物語」が提示される。話は主人公のパトリスがカトリーヌとブローヌユの森の湖でボートに乗っているところから始まる。1926年6月である。2人は昨年バカロレアの試験のときに顔見知りになり、その後カトリーヌが1年間イギリスで過ごし、先週再会したばかりだった。パトリスは20歳でカトリーヌは18歳だった。ボートに乗っているときの情景は次のように描写される。「菩提樹とアカシアの香り馥郁たる6月の空を眺め、小さくオールを刻みながら」2人は進む。そして「小舟は2つの島の間で静止し、いまや湖には、否、彼らだけ

しかいなかった。おそらくもう二度とこの青春の束の間の友と会うことはないだろう。だがこれこそまさしく彼の青春であり、木々、鳥、湖水、そよ風を背景にした朝の8時の空に刻印された、はかない20歳なのだ」。2人は深刻な話や打ち明け話はいっさいせず、試験、授業、芝居、映画などについてとりとめもなく言葉を投げ合った。「身軽さ」が2人を結びつけていた。

この引用のなかに、早くもブラジヤックの思想を解く主たるキーワードが出てくる。その一つは「島」だ。ブラジヤックの作品には島ないし島がイメージするものが頻出することは、多くの論者が指摘している。高井道夫氏によれば、「古代ギリシア・ローマおよびヨーロッパの神話体系のなかで、島のイメージは、天上の楽園から追われた人間が求め続けるユートピアを象徴し、「現実の世界からは時間的にも地理的にも隔絶した位置」を占める。島をイメージすること自体が地中海的な伝統に入るが、それだけではない。モーラスが唱えるような古典的な「理性的秩序」の美の伝統は神話でしか表現されないのだから、島は失われた伝統を再発見するために、現実世界から観念を切り離す装置としても機能する。ただ、それ自体は具体的ではない。ブラジヤックにおいて、こうした伝統に育まれて表象されるのは個人の「幸福」であり、それを具体化したものの一つが幼年期の思い出である。彼は幼少の頃、とても仲の良かった妹のシュザンヌと屋根裏部屋で、ふたりだけの島をつくって遊んでいたそうだった。外部世界を遮断した自分たちだけの魔術的な世界に入り込み、愛情を分かち合える安心した場所だったろう。そしてもう一つが「青春」である。『七彩』のこの場面では、こうした意味で、つまり「幸福」の「島」という意味で2人だけの「青春」の隔離が行われている。

数日後パトリスがカトリーヌの家を訪ねた。そして夏の数週間、2人は時代の文学的流行である旅行と逃避をすることにし、パリのなかを旅し、自分たち自身に逃避行する日々を送った。こうしてパトリスは兵役までの3週間のヴァカンスをカトリーヌとパリで過ごした。カトリーヌは子供時代の話をし、パトリスは住んでいるペンションの話をした。それにパトリスは政治の話が好きだ。カトリーヌはこれには少し辟易していた。しかし、2人は素性不明な若者で、お互いの「影法師」、「亡霊」、「肉体化された青春の二つの瞬間」に過ぎず、夜になれば自分たちの領分で「不在者」のことを考えていたとされる。ちなみに2人の会話のなかには、ブラジヤックの地中海に生まれた幼年期の記憶が「幸福」を表象することを暗示する箇所もある。カトリーヌが毎年夏に行く祖母の家がある地中海の海岸について話したとき、パトリスが示した反応がそれである。パトリスはそれを聞き、「延々と広がる黄色い砂の上に降り注ぐ熱気を

想像し、海の青さによって一段と濃く映える青い山並みを、地表から立ち昇る夏のもやのなかに想像した。彼は目を閉じて、腕の匂いを、焼きたてのパンのような腕の匂いをかいだ。いま彼は自分自身の子供時代に思いを馳せ、ほとんど涙が目にこみ上げてくるばかりに幸せだった」。

7月のある日、2人はパリ20区にあるサンジェルマン・ド・シャロンヌに行く。12世紀から建てられ始めた古い教会と墓地のあるこの町で、7～8歳の2人の男女の子供と出会う。男の子は女の子をフィアンセと言い、お姉さんたちも婚約していると断言する。驚いたことに2人の子供の名もパトリスとカトリーヌだった。4人は墓地で昼食をとる。そこはパリという都会にありながら「その空間の外に運び出され、死の観念すら祓い清められてしまったような田舎の墓地」だった。パトリスとカトリーヌは自分たちの分身と笑い興じ、そのあと街を見学した。シャトレ広場で別れたあと、その日の夜にカトリーヌがパトリスを訪ねる。2人はセーヌ河にそってノートルダム寺院に向けて歩いていく。「それぞれが人生のこの一刻を、生の決定を前にして、2人に与えられた、この束の間の幸福を味わっていた。」

パトリスが兵役に就き、カトリーヌが祖母の住む地中海のそばの町に向けて出発する前の最後の日、2人はパトリスの部屋で服を着たまま並んでベッドに横たわり、体も触れ合わなかった。パトリスは欲望に屈することに必死に抵抗し、空想のなかで自分を我がものにしようとした。カトリーヌは自分の心に忍び込み、虜にしている困惑の正体が分からなかった。2人は「身を触れずに近づき合い、合体せずに一つに溶け合うべく極度の緊張感に陥っていたが、突然、同じ瞬間に何かが彼らの内で碎け……2人は存在を止めた」。こうして気を失っているところを、2人は同じペンションに住む人に見つけられた。「完全な自己消滅のこの数分、この純粹状態での肉体の結合におけるほどに、完全に男の夢を実現することは二度とあるまい」とパトリスは後に考える。没我的な美的恍惚にまで達した個人の「幸福」の絶頂であり、何度も立ち返ることになる「青春」の瞬間である。

「第二章・手紙」は、パトリスとカトリーヌの間の往復書簡という形式をとっている。最初の手紙は2人が別れてから1年3か月後の1927年11月3日で、日付が入っている最後の手紙は1928年3月25日である。そのあとにカトリーヌからパトリスへの日付のない手紙があり、最後はパトリスの未発送の下書きになっている。そこからまず、パトリスが1年で除隊し、今はフィレンチェで1年の予定で家庭教師をしており、カトリーヌは1927年10月から、父の教え子のダルニエの飛行機製作会社で秘書として働い

ていることが明らかになる。

パトリスは最初の手紙のなかで、フランスで脅威を言い立てられているイタリアのファシズム国家が「優美」であると賛美している。靴屋が空を喜び、大地を喜び、自分の町を愛し、イタリアを愛しているといったように、略奪や革命や死の心配がなくなったおかげで、大衆は軽やかな表情をし、素晴らしく魅力的であると手放しで賛辞を送っている。その後の手紙でもファシズムへの称賛はやまない。ブラジヤックは高校生の頃からイタリア・ファシズムに賛同していた。同じラテン文化のもとにあり、彼と志向が一致する14～16世紀のルネサンスを生み出した国に好感を持っていたことは想像に難くない。そこで興ったローマ帝国の復活を訴える運動ということになれば、共鳴したのは当然だろう。この点では、モーラスも同じである。2人とも1935年にイタリアが国際連盟を無視してエチオピアに侵攻したとき、イタリアを支持した。

パトリスは手紙のやり取りの中で、カトリーヌに「不在感」を訴えるようになる。パリの壁、劇場、カトリーヌの家ははっきり見えるし、会社の様子まで分かるが、しかし、カトリーヌの姿だけは見えないと書く。パトリスは自分のことを「カトリーヌの不在者」と呼ぶようになる。それに対してカトリーヌは、肩の凝らないやさしいことだけを書き合うと約束したにもかかわらず、感情がストレートに迸り出るパトリスに戸惑う。そしてパトリスがおもちゃと夢中になって戯れている姿がはっきり見えること、不安定の魅力はあるが安心感を与えないこと、同僚の共産主義に共鳴するフランソワと映画に行く約束をしたことを告げる。フランソワは少し堅物でカトリーヌに安心感を与える男だった。パトリスはカトリーヌの言葉の根底にある軽さこそが危険で、自分は特別な美德に執着していると言う。軽さとは何で、美德とは何か。おそらく軽さとは、熱狂を目の前にすると「プチブルの娘が姿を現す」といったパトリスの表現から、日常生活に執着することだろう。また美德とは、「人生の素晴らしい瞬間だけを選び取りたいという願望」や、「価値ある瞬間を崇拜することの魅力」といったカトリーヌの表現からすれば、日常を超越することだろう。そう考えると、パトリスが感じる「不在感」とはカトリーヌと日常を超越した瞬間へ回帰する願望である。

こうしたやり取りの後、カトリーヌは、ブローニュの森の湖にあった島がただの島以外でありえたかどうか知るために、そしてお互いを知るためにも時間が必要と言うが、パトリスはまったく役立たないとはねつける。そして20歳になったカトリーヌはフランソワと結婚することをパトリスに告げる。未発送のパトリスの手紙には、「僕らは死のそばで結婚式を挙げた」こと、「美しい教会のそばで僕らの子供たち」と過

ごしたこと、「僕は僕の青春を愛している」こと、「君は青春を恐れていること」が書かれていた。

「第三章・日記」は、時間がとんで1935年10月18日から始まるが、その前のことにもふれられている。パトリスはイタリアからパリに帰ってきたあと、1928年10月18日に外人部隊に入ることが決まり、5年間モロッコ、アルジェリア、ギアナなどアフリカで道路工事などをしていた。最初の頃に知り合ったドイツ人のジークフリート・カーストから1933年9月に手紙をもらい、彼の勧めで除隊後にニュールンベルクのフランス人商工会議所の事務局長になった。その2年後から日記が始まっている。リースベートという19歳のドイツ人の愛人らしき女性のこと書かれている。

1936年9月5日、10年前に同じパリのペンションに住んでいたセネークという老人と偶然会う。セネークはフランス人商人の代表団の一員として、この日から開催されるニュールンベルクのナチス党大会に派遣されていた。この後、党大会の様子が詳細に書かれている。実は、ブラジヤックは『ジュ・スイ・パルトゥ』誌の記者としてナチス党大会を取材し、ヒトラーとの会見も果たしている。そしてその記事を『七彩』のなかでも使っている。ブラジヤックが反ドイツ感情をもっていたことはすでに述べたが、1933年にヒトラーが首相になり、独裁国家になったときも、おそらくその感情に変わりはないだろう。地中海の陽光の輝きに対し、ゲルマンの森は暗くて陰鬱なものとして捉えられていた。イタリア・ファシズムが前者から生まれた古典古代的伝統のなかに入るものとして素直に受け入れられたのに対し、ドイツ・ナチズムは後者が生み出すロマン主義に染まった悍ましいものと感じられていた。このことはパトリスの日記のなかでは、「はるか彼方の東洋の国よりもたぶんもっと、我々から離れているこの驚くべき国で過ごすあいだ、苛立たされたり、不愉快な思いをしたことは幾度もあった」という記述に表れている。

しかし、ナチスの祭典はパトリスに激しい衝撃を与えた。パトリスは「あのスペクタクルの一時は忘れることができない」と言う。それは党大会のクライマックスのことだ。夜8時に総統が参謀を従えて入場し、スタジアムを横切る瞬間、場内一帯にめぐらされた投光器が一斉に点灯されて空に垂直に向けられ、「民族の神秘の聖地」が示されてからの時間だ。沈黙のなか、総統が演壇に立ち、赤い団旗をもった旗手の横隊が投光器の光に照らされ、溶岩流のようにゆっくりと前進し、直立した総統の足下に到達して停止した。それから総統の演説が群衆を興奮の坩堝に陥れた。こうしたスペクタクルをパトリスは「異教徒のめくるめく壮麗さ」としつつも、その抗いがたい

魅力を認めざるをえなかった。そしてその理由を、一つひとつに内容と意味があり、すべては一個の教養、知性、感性に立脚して、世界の表象、生と死の価値に関する、この上なく厳しい思想と結ばれていることに求める。このパトリス、というよりもブラジヤックが儀式的の構造を読み解く観察眼は卓越している。そしてここに、パトリスとカトリーヌが一体となったことと同種の興奮、すなわち青春のエネルギーの爆発を感じ取ったのではないだろうか。

こうしたナチスに対する二重の感情は他にも出てくる。パトリスは総裁の主催するパーティーで彼に会ったときの様子を詳細に書いている。そこに描かれているのは、「新しい人間」を誕生させるために、すべての幸福を犠牲にする悲哀と覚悟をもったカリスマ的指導者である。そこには確かにヒトラーに敬服するパトリスの姿がある。しかし、手放しで受け入れているわけではない。続けて「ドイツにとってかつて幸福というものが重要であったためしがない」とも冷やかに書いている。その前に出てくるヒムラーの暗殺にみられるような、神秘的な義務のためなら簡単に仲間を犠牲にすることを批判している箇所も、そうした文脈で理解できよう。パーティーのすぐあとでナチスの殉教者を祝福する国旗の聖別という儀式について述べたなかでは、そこには神秘主義的な血の思想に基づくドイツの秘蹟があり、東洋風の印象が際立っているとしている。「新しい人間」の創造という点ではイタリア・ファシズムも同じだが、イタリアのことは理解できるのに対し、ドイツはインドや中国よりも理解しづらい「不思議な国」という印象をもつとパトリスは書いている。ラテン文明を賛美する人間がドイツのゲルマン文化に違和感をもつのは当然であり、それはヒトラーと会っても根本的には変わらなかった。しかし、イタリアを含めたファシストすべてに関して「新しい人間」の創出という共通点を見出していることは、それ以上に重要である。ファシズムを理解するうえでそれこそが鍵であり、『七彩』の主題に直接結びつくからだ。

党大会の後、パトリスはセネークとの会話のなかでカトリーヌの消息を聞く。セネークはときどきカトリーヌと会うこと、彼女と結婚したフランソワが今は通信社に勤めており、共産主義者だったのに今は逆で、2月6日の事件で負傷したことを知る。8年ぶりにカトリーヌのことを聞き、パトリスは深くかかわる他者との関係には、天体と同じように周期性があるはずで、彼女に再会することをいつも期待していたと日記に書く。数日後、セネークは、カトリーヌは言葉とは裏腹に恋愛結婚ではなかったと告げ、パトリスに彼女に会いに行くべきと言う。セネークを送って帰ってくると、ドアの後ろで聞いていたリースベートがパトリスがパリに行くと思い、睡眠薬を飲んで

自殺を図っていた。リースベートは回復し、単調な生活に戻った。しかし、2か月以上たった頃、フランスに行く任務を言い渡される。パトリスは戻ってくると心に誓うが、「灰色の亡霊」が幸運にも自分のところにやってくることを密かに期待している。

「第四章・省察」は、パリに行くことになったパトリスがカトリーヌに会うことになる第五章との間にあって、30という年齢について考察している章である。30歳になったパトリスの口を借りているが、そこにはブラジヤックの理念が直截に書かれていると言ってよいだろう。そしてそれは、ファシズムに向かう内面を知るうえできわめて重要な箇所である。

冒頭、パトリスは15世紀中頃に生きたフランスの詩人ヴィヨンが『遺言詩集』を30歳のときの告白から始めたことを取り上げ、30歳は「遺言の年齢」だという。子供時代が14歳で、青年時代は30歳少し前で終わる。昔、30という年齢は「人に言って恥ずかしくない最後の数字」であり、「その後はただ老いへの恐れ、いっさいの愛の保証の終焉、いっさいの力の終焉が訪れるばかり」であった。しかし今では、若者と同じように振舞っている。パトリスはそれを「人為的な延長」をもたらしているに過ぎないと切り捨てる。30歳は「真剣勝負をしなければならない年齢だ」と言う。とはいえ、昔のようになれと言っているわけではない。それぞれの年齢にはそれぞれの自由と美しさがあり、「30歳という年齢の自由と美のみが初めて明晰さと結ばれる」として、その意味で積極的に捉えられる。しかし年を追うごとに発展的に成長するという楽観的なヒューマニズムでは毛頭ない。

パトリスは30歳を「青春の陶醉、歡喜、苦悩の追求がドラマとなる最初の時」と言う。重要なのは「青春」の意味づけである。それについては次のように書かれている。「人生には青春は一度しかない。僕らは青春を懐かしみながら残りの日々を過ごす。この世で青春以上に素晴らしい、感動的なものはなにもない。……そこには人間の肉体が壊れることなく耐えることのできる、最も胸躍らせるすべてのものが含まれていた……。僕らの思い出のなかでは、あの脆く素朴な瞬間は、快樂、野心、成功、恋、真実を満足させることより断然価値がある。」パトリスにとって、青春は幸福であり、それも人生のなかでもっとも生命が躍動し、もっとも光輝に満ちた幸福である。しかし、30歳の人にとってそれは過去だ。こうした瞬間が続き、青春を引き延ばせると思い込み、自分が変わっていないと思うことは重大な誤りだ。また逆に「老い」に向かうこと、つまり安楽と金への「趣味」に浸ることも危険だ、とパトリスは言う。

ここでパトリスは彼の世代の難しさについて語る。1914年に戦争に行った世代は戦

争に希望を託し、それに精力を傾注した。それに対して1900年から1910年に生まれた世代は戦争のなかで子供時代を過ごして戦争に何の希望ももっていない。幻想のヨーロッパのなかで大人になったのも束の間、今また大恐慌や戦争の到来に怯え、その運命と格闘している。この世代は19世紀の自由主義的な神話に参加し得た最後の世代であり、その伝統的な均衡を失った激動の時代の奔流のなかで、精神の健康を害することもある。「希望の不在」を生きているのだ。ブラジヤック自身、戦争や流血は望んでいなかった。そこに希望を託したこともなければ、そのように考えたこともなかった。ここにブラジヤックとその上の戦争世代のファシストとの違いを若干垣間見ることができる。フランスでは1930年代に多くのファシスト団体が存在したが、それに参加した人の多くは旧出征軍人である。ブラジヤックの一つ上の世代だ。パリ騒擾事件のときに活躍した愛国青年同盟、アクション・フランセーズ、ソリダリテ・フランセーズ、フランシストなどの中樞を構成していた人々であり、「1914年の世代」と言われる行動主義的な志向をもった世代だ。ブラジヤックはこの事件を傍観し、深い感銘を受けたが参加しようとはしなかった。こうした世代間の差違に言及するのは、ブラジヤックの世代がその前の世代と較べて絶望が深いだけに、より純粋なファシズムに近いことを言おうとしたように思われる。

この章の最後にファシスト的人間の誕生が述べられる。パトリスはそれを、百科全書派やジャコバンと較べても遜色のない「驚異的な新しい人間のタイプ」であり、時代のもっとも確実な権化であるとする。戦争や革命の危機に苦しんだ人の多くは、「純粋な国家、純粋な歴史、純粋な民族を欲し、軍隊や群衆の律動的な動きが巨大な心臓の鼓動を思わせる、あの人間の大集会のなかでともに生きることを好む」。そこには自由主義であれ社会主義であれ、その時代の既成イデオロギーに対する信頼は微塵もない。それらは言葉だけの正義として軽蔑される。ファシストが信じているのは、「力によって統治する正義」のもとに、スポーツ・チームのように一つになることだ。ここでパトリスが言っているファシズムは、独裁者による全体主義的支配のことではない。結果的にそうなるとしても、重点が置かれているのは、各人が全体と一体になることにより力が漲るのを感じ、そこから喜びが生まれることだ。それは感性与理性によって精神を緊張させることから生まれる喜びであり、これまでのこの小説の内容からすれば、青春の喜びに匹敵すると言ってよいだろう。パトリスは、ファシズムに敵対する人はこの喜びが分かっていないとして、ファシズムの本質がそこにあることを示唆する。こうした行論から、この章の最初に出てきた30歳の「明晰さ」が理解できる。

抑えがたい欲望や逸り気に任せて突き進んだ青春ではなく、自分の存在と状況を見極めつつ「選択」することである。それが唯一の存在理由というわけだ。これまでの話から、ここで選択したものが「青春」で、それが「ファシズム」であると理解できよう。

この箇所ファシスト的人間に関して留意しておきたいことが2つある。双方ともファシズムの本質をどこにおくかに係わることだ。パトリスはニュールンベルクの党大会のとき、ドイツに何千とある労働キャンプのなかの一つを視察している。そこでは19歳の若者が一緒に生活し、軍隊的な厳しい日課のもとで労働し、いかにもドイツ的な祖国愛と忠誠と厳粛さに充ちた歌を歌っていた。パトリスはそこに社会階級を超えた強靱な同志愛を見出して驚嘆し、それこそが第三帝国の斬新さと底力であると認識する。『七彩』のなかには何か所か戦場の友愛の話が出てくるが、それも同種の愛情である。ブラジヤックにとって、こうした同志愛や友愛も幸福な青春の意味をもっている。ただし、彼が見たヒトラー・ユーゲントをそうしたものの担い手と捉えているわけでは必ずしもない。パトリスが興味をもっているのは、自由主義の時代の終末を体験した人間がそうなることであり、最初から全体主義体制の下で育った人間が成人になったときは、「多分結果はあまり芳しくないだろう」と述べている。そこには、ドイツに対して異質なものを感じたことと同じ感覚がある。ドイツをインドや中国と比べたときもそうだったが、念頭にあったのは、オリエンタリズムの端緒となったダレイオス1世やクセルクセス1世が象徴するような東洋専制主義だったのではないだろうか。そこには個人の選択の余地はまったくない。それがブラジヤックの求める個人の幸福とは正反対なものであることは言うまでもない。

もう一つ留意しておきたいのは、パトリスのなかで、ナショナリズムとファシズムは同一ではないことだ。確かにパトリスにはモーラスの弟子としてのブラジヤックのナショナリズムがそのまま現れている。外人部隊で出会いパトリスにニュールンベルクでの職を紹介したジークフリートや、愛人のリースベートのなかに、「この民族に固有の真剣さと道義心という二つの美德」を認めつつも、ドイツとフランスがいつか和解し合えるとは思っていないと言う。ここにはエスニックな意味での民族性に基づく論理がある。しかし、10年もたって「第三帝国の正真正銘の人間」が見られるようになったら、「ザクセン色とかバイエルン色」といったものが一切なくなるとも言っている。ここから、明らかにファシズムはナショナリズムとは異なる論理に立っていることが分かる。

Ⅲ 青春と永劫回帰

「第五章・対話」は4場構成の劇仕立てになっている。第1場ではカトリーヌとフランソワの仲の良さそうな会話から始まる。そのなかでフランソワはドイツに通信社を開設すると言うが、パトリスがドイツにいることを偶然知っていたカトリーヌは行くことを拒む。それを知ったフランソワもドイツ行きを諦める。数日後となる第2場では、パトリスがカトリーヌのところに現れる。パトリスが僕らは眠っていたにすぎず、死んだように並んでいたのが結婚式で、シャロンヌで出会った2人の子は僕らの子供だったと言う。それに対しカトリーヌは、私は幻想を信じない、私は夫と満足した生活をしている、帰ってくれと言う。しかし、パトリスが帰ろうとすると、カトリーヌはパトリスに触れさせてくれ、行かないでくれと頼む。パトリスは、ともかくこの10年を取り返すために君を連れていきたい、「18, 20歳のあの夢がまさしく現実で……戦雲垂れこめる変わり果てた世界のなかで……この30歳の肉体に再現しうることを悟ったんだ」と言う。カトリーヌに将来のことを聞かれても、分からない、幸福のことなんか考えていない、この瞬間のほかは問題にならないと答える。カトリーヌは時間がほしいと言い、また来ると言い残してパトリスは帰る。第3場ではフランソワが、カトリーヌがパトリスと再会したことを確信していると言い、カトリーヌもそれを認める。そして現実の力でこの家に引き留めてくれるようにフランソワに懇願する。でもフランソワには自信がない。第4場ではパトリスが再びカトリーヌのところにやってくる。結局、カトリーヌは夢の中に入ることを諦め、パトリスは一人でドイツに帰る。それを見送りにいったカトリーヌをフランソワが目にして、「おれも軽やかになりたい」と嘆くところで終わる。

「第六章・資料」は、フランソワが収集したファシズムやスペイン内戦関係の新聞記事や本の抜粋、フランソワのノート、フランソワの消息を伝える手紙などから構成されている。ブラジャックが以前に書いたものの転用も含まれている。そこから読み取れるあらすじは以下の通りだ。フランソワはカトリーヌがパトリスと一緒にドイツに行ったと勘違いし、スペインに無一文で渡り、ファランヘ党に外人部隊の一員として参加していた。1937年1月2日のことである。彼はスペインからセネーク宛に手紙を送り、エルビヨという偽名を使っていることと、外人部隊を通せば連絡がとれることを知らせていた。その後フランソワは戦闘中に迫撃砲の破片で重傷を負い、病院の軍

医長からセネークのもとに、フランソワの負傷を知らせるとともに、奥様にも知らせたいとの内容の手紙が届く。こういったあらすじだが、なぜ共産主義から右翼に転向したか、なぜスペイン語が話せないにもかかわらずスペイン内戦に飛び込んだのかについては説明がない。この章の大半はスペイン内戦に関するさまざまな記述である。スペインはブラジヤックが生まれた地に近く、彼の祖先がいた国だが、スペインを舞台に選んだことにはより深い理由があった。

スペインでは第一次世界大戦後の混乱のなかで、1923年にミゲル・ブリモ・デ・リヴェラ将軍の軍事独裁が成立した。独裁が7年間続いた後、世界恐慌のあおりで経済が失速すると将軍は亡命し、数か月後に死去した。翌年の総選挙で左派が勝利し、国王が亡命して共和政が成立する。1933年総選挙で右派が勝利するが、1936年総選挙では再び左派が勝利する。ファランヘ党はこうした政治的混乱のなか、将軍の長男ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リヴェラが1933年に結成した、スペインで最初のファシスト団体である。ファランヘ党員の多くは21歳以下の学生であり、まさにブラジヤックが求める「青春」を体現した団体であった。1936年2月に人民戦線政府が成立すると、ホセ・アントニオは翌月に銃の不法所持の嫌疑で逮捕された。当時のスペインでは、すべての党派が私的に銃で武装していたにもかかわらず、である。そして1936年7月17日にスペイン内戦が始まると、ファランヘ党は反乱軍側についていたので、ホセ・アントニオは10月に共和国に対する陰謀と軍事的反乱の廉で告発され、11月に銃殺刑に処せられた。翌年、反乱軍を率いたフランシスコ・フランコがファランヘ党の党首に就いて反乱軍の中心となり、1939年に内戦が終結してからはファランヘ党がフランコ独裁体制を支えた。

ホセ・アントニオは法律家、政治家、小説家、詩人という才能に溢れた多彩な人物であった。彼もブラジヤックと同様にモーラスの信奉者で、地中海の文明に憧れる古典主義者だった。ファランヘ党の制服は青を基調としたシャツで、党の歌は「太陽に向かって」である。1903年生まれで比較的年齢が近かったこともあり、ブラジヤックは彼に親近感を抱くとともに、深い敬愛の念を抱いていた。ブラジヤックが30歳という年齢に拘ったのも、ホセ・アントニオがファランヘ党を結成したのが30歳であったことに関係するだろう。また、パトリスを1906年生まれとしたのは、30歳のときにスペイン内戦が起こるように設定したからではないかと思われる。ブラジヤックにとって、スペインで興ったファシズム運動にはそれほど特別な意味があった。

まずはファシズムに関する資料から見ていこう。ムッソリーニの言葉からの引用で、

ファシズムは「生命を与える精神によって普遍的」であり、それによって「20世紀の国家の問題」をヨーロッパを舞台に解決する構想、すなわち「ファシズムのヨーロッパ」を実現できることが語られる。往々にしてあることだが、ファシズムをナショナリズムの強化された型と見る人からすれば、奇異な感があるかもしれない。しかし、当時のファシストからすれば、ファシズムは個々の国家に限定されるものではなく、ヨーロッパ文明を刷新する理念であった。少し詳しく説明しよう。

フランス革命以降、国民国家という政治形態が一般化した。国民と国家という概念はもともとは別の出所をもつ概念であり、それぞれが権力主体という意味をもっていた。16世紀に統治機構としての国家が成立したのち、国家という統治機構によって枠づけられ、国家に一定の権力を行使できる集団として国民が成立した。ナショナリズムとはこうしてできた国民の統合を強化することである。したがって、それはしばしば国内外に国家権力を拡大する国家主義と連動する。国民の統合原理が何であろうと、つまり自由主義、民主主義、社会主義、共産主義のどれであろうと、国民国家という体制のもとにあるならば、こうした動きは確実に存在する。実際、自由主義が統合原理となった19世紀のヨーロッパでは、ナショナリズムと一番親和性があったのは自由主義であり、そのもとで帝国主義が発展した。それにもかかわらず、自由主義はナショナリズムの一形態ではなく、一般的な政治原理とみなされている。その理由は、個人の自由を基礎にして構成された政治原理だからだ。もっとも、その意味で言えば、近代以降の政治原理はすべて何らかのかたちで個人から出発している。「神が死んだ」時代において、最高価値がなくなった以上、個々の内面を基点にせざるをえないからだ。たとえ共同体主義的な発想をとるとしても、個人が共同体のなかでなければ人間たりえないところから出発している。自由主義は個人のもつ理性に依拠するので、はっきりと個人主義的であり、理性主義的だ。

ファシズムは、少なくとも当事者であるファシストの発想では、以上のような意味での自由主義が支配的なヨーロッパ文明に対し、別の原理でヨーロッパを再生しようとする革命理念である。その原理が革命的なのは、ヨーロッパ近代の根幹にある理性主義を否定するからだ。その非合理主義は、この章では『我らの戦い』という資料のなかで、ムッソリーニがソレルから学んだと明言している神話論を用いて説明されている。ソレルの神話論では、神話は「いま現在行動するうえでの手段として裁かれなければならない」。つまり、神話とは、理性を介さずにあらゆる感情を本能的に喚起することで行動を惹起するイメージの組織体である。その根底にあるのは、そうした行

動そのものが生の根源であり、そこに神なき時代の創造的価値があるという認識である。この行動は、ソレルが依拠したベルグソン哲学では「純粹持続」という概念で表現された、自己と全体が一体となって神聖な生命力の湧出を感じる状態のことである。そこには宗教的な直観がある。それが起こるのは、生の弛緩に抗する意志的行為によって緊張状態をつくりだす時であり、ソレルの神話とは、まさにそれを生み出すための媒介である。ファシズムの場合、その神話は最終的には戦争に帰着する暴力や権力への信仰を核にして構築される。いかなる理念によって彩られるとしても、根本にあるものは同一である。

このようにしてファシズムはヨーロッパ近代を前提にして個人から発する理念である。だから自由主義のように、ヨーロッパ各国で発現しうる原理となる。しかし、ナショナリズムとの関係でいえば、自由主義とファシズムとはやや異なる。ナショナリズムの母体となるネーションの構成原理が異なるからだ。そもそもが国民国家においても、国民＝ネーションと国家が一致しているわけではない。自由主義の場合、市民的自己決定がネーションの統合原理になるケースが多いので、国家と一致することが多い。それは、国家をもたずに国家を求める民族が独立することを促進する一方、国家内でネーションが複数に分かれて対立する場合は分裂を阻止するように作用する。ファシズムの場合、理性や理性的議論は否定され、カリスマ的指導者に帰依する大衆の政治なので、市民的要素がほとんどなく、その代わりにエスニックな要素が突出する。エスニック的要素が統合の核となるタイプのナショナリズムは、国家と一致する場合、ネーションの統合強化と他民族の排斥を唱える右翼ナショナリズムになることが多い。モーラスのように自由主義体制の打倒を唱える過激主義的な極右であっても、国家に一致するネーションの統合や伝統の再生を言う限り、右翼ナショナリズムの域を出ることはない。ちなみに、国家をもたない民族や国内で少数派の民族が独立を唱えるときもエスニック的要素を核にするが、この場合は市民的要素がなければその主張は認められないだろう。程度の差はあれ、「自決」という自由と平等を含意する要素が独立には含まれるからだ。ファシズムは以上のどのナショナリズムとも異なる。戦争のような暴力的闘争に最高度の生の発揚を見る行動主義はさまざまなエスニック的要素を神話にする。たとえば、イタリア・ファシズムのローマ帝国の復活やナチズムのアーリア人種主義だ。前者の場合は国家主義と結びつき、簡単に拡張主義の方向に進むが、まだナショナリズムの範疇にある。右翼ナショナリズムと違うのは、エスニック的要素ではなく行動主義が基礎にあることだ。このタイプについては、「超ナシ

ヨナリズム」という言い方ができるだろう。それに対して、後者の場合は国家も国民＝ネーションも乗り越える可能性がある。ナチスの生存圏思想の根底にある、自然なものとしての人種をめぐる永久闘争の理念は、主体が人種であるゆえに、旧来の政治的枠組みに収まらないからだ。アメーバーのように拡がる闘争のなかで、国家という領土を前提にした概念は絶対的なものではなくなるし、そうなれば国家の存在を前提とした国民＝ネーションもさして重要な意味をもたなくなる。そこまでいけばナショナリズムの範疇に入れることは難しいだろう。ちなみに、最近の例で言えば、「イスラム国」をつくったイスラム原理主義グループが形式的にはナチスにもっとも近い。

『我らの戦い』では、ファシズムを実現しようとした運動が興った国として、イタリア、ドイツ、トルコ、オランダ、イギリス、スイス、ブルガリア、デンマーク、ノルウェー、ギリシア、ルーマニア、ベルギー、そしてスペインの名をあげつつ、「ヨーロッパの最も高貴な大地」であるスペインで、初めてファシズムと反ファシズムが血みどろの闘争のなかで対決し、ファシストを「真の十字軍」に変えたとした。そしてそれによってこの思想戦争に「神聖さと決定的な高貴さ」を付与したと述べられている。また、スペインの戦争が「ロシア革命に匹敵する革命」であり、1917年以来、戦闘のなかでなされた唯一の革命であるとも述べられている。資料にある「フランソワ・クルテのノート」では、スペインの戦争が16世紀の宗教戦争に似ており、20世紀前半はファシズムか反ファシズムかの宗教戦争の時代であると書かれている。同じく資料にあるピエール・レノーの論説「ラ・ルヴェ・グリーズ」は、戦争が始まってから2年と書かれていることから1938年に書かれたと推測されるが、そこではスペインの「なみはずれた美德」が強調されている。それは戦争を耐え抜くこと、そして銃後においても未来を考えて、生活を有効に組織立てていることである。そこでは規律と権威が支配し、階級の別なく偉大な民族の目的のために人々が団結している。そこにみられるのは「友愛」であり、それはナチズムとは異なる親密なキリスト教的精神である。この「ファシスト的カトリシズム」の独創性はスペイン固有のものである。こうした内容の論説の引用から、なぜブラジャックがスペインに惹かれたかが分かる。モーラスは宗教をもたなかったが、その伝統主義的なナショナリズムは、カトリシズムを伝統のなかを含めており、フランスの秩序をつくるうえで、カトリシズムを君主政とならぶ重要な要素として位置づけていた。このモーラス型ナショナリズムとファシズムが結合したのが、スペインのファランヘ党だったからだ。

レノーの論説はこの結合について、伝統主義的な王党派であるカルロス党の「聖な

る伝統」とファランヘ党の「夜明け」が結びつき、新しいスペインのうちに国家の偉大さが再生すると論じる。「大胆かつ強靱な」ルネッサンス時代の国家、すなわち神聖ローマ皇帝になってカトリック的な世界帝国の形成をめざしたスペイン国王カール5世や、アメリカ大陸を征服したコンキスタドールがいた16世紀前半という、かつての黄金時代の国家の再生である。19世紀の自由主義の誤りを脱し、今や大都市でも小都市でもこうした「スペインの神髄」が見出される。そして「現代人はスペインのうちにあらゆる大胆さの、あらゆる偉大さの、そしてあらゆる希望の地を発見することだろう」と結んでいる。こうした400年前のことを再現しようとするかのような、一見復古的とも思える言説がファシズム的なのは、それが一人の個人の心象のなかで、感情と直接行動に訴えるイメージとして、すなわち神話として現れるからだ。

「第七章・独白」は最終章であり、カトリーヌがフランソワのもとに向う列車のなかで自分の過去を振り返り、心情を述べるという設定になっている。フランソワが出て行った後、残されたカトリーヌは家で彼の帰りを待っていた。パトリスはニュールンベルクの自分の住所を手紙で教えていたが、それでもカトリーヌはフランソワを待ち続けた。長い時間がたち、セネークからフランソワがスペインの戦場で命の危険を冒していることを聞かされた。カトリーヌは一人で待っている間、フランソワに執着する理由を長いこと考え、それを見極めるために青春を再現することを決めた。そしてフランソワと知り合った会社を訪ねたりした。しかし、それ以前の青春に出くわし、本物と亡霊を代わるがわる追いかけながらパリを何日も彷徨った。18歳の頃の彼は抽象的な青春の夢に過ぎないとして、その想いを消し去るために、だ。そして堅固な支えを必要とするかなり厳しい時代にあって、夢や不確かなものは除去しなければならない、亡霊は亡霊にすぎない、すべてのことが一緒になって真の伴侶の方へ、几帳面で実在感のある男へと駆り立てていると思うようになった。この章は数日前のエピソードで終わっている。その日カトリーヌはフランソワが愛したサン・マルタン運河のラ・ヴィエット橋のたもとで、一人の若者に話しかけられた。その若者もスペインに行き、政府側で戦って指を二本失くしていた。彼はカトリーヌに亭主を探し出す努力をしなければならないと言う。最後の独白は、その若者が別れ際に教えてくれた名前が、なんと10年前にサンジェルマン・ド・シャロンヌで会った子供の名だったことだ。この出来事をきっかけにして、カトリーヌはフランソワのところに行く決心をする。翌日、フランソワが負傷し、このことを奥様に伝えてほしいという軍医長の手紙をセネークから見せられた。

カトリーヌはなぜフランソワのところに向かったのか。現実的に考えて、危なげで魅力的な青年への不安定な想いを断ち切り、実際に結婚している堅実で誠実な夫とともに生きることにしたということだろうか。最後のところに「こうして青春期の循環は閉じられた」というカトリーヌの言葉があるが、それは若かった頃の軽々しさがなくなって、地に足が着いた考え方になったということだろうか。これまでのストーリーを考えてみれば、別の見方もできる。

パトリスが20歳のときにカトリーヌとともに失神したことは、極度な緊張のなかで生の横溢を感じ取る謂わば「純粹持続」の体験であり、それがまさに「青春」の「幸福」であった。そして30歳のときにパトリスがカトリーヌに会いに行ったのは、この経験への回帰であった。それは30歳という年齢に見合った選択の結果であった。カトリーヌがパトリスとドイツに行ったと誤解したフランソワは、スペインの内戦に飛び込んだ。これに関してカトリーヌは「本物のほうは偽物の信条を手本にし、かつての他方のすべてを、他方がおこなったすべてのことをみずからの精神と人生と行動のなかに懸命になって再現しようと努めたように思われる」と述べている。フランソワもまた、スペイン・ファシズムに「青春」を求めたのである。カトリーヌはフランソワが去ったあと、自分は亡霊に忠実なのかどうか悩む。そして「最初の男がもう一人の男への準備、下絵」であったことに気づき、フランソワのもとへと向かうことになる。フランソワがいる野戦病院は安全なところなどではまったくない。そこに行くには相当の覚悟がいるだろう。ここから分かることは、カトリーヌもまた、18歳の失神のときに信じた「青春」に10年後に回帰したことである。10年前に会った子供に再会し、青年になって戦場で負傷したかつての子供にフランソワのところに行くように促されたのは、まさにこうした回帰を直截に表現している。

これは時代のもたらした困難であろうか。カトリーヌの独白には、「今の世の男たちと幸福のあいだには何か大きな運命が入っており」、家に引き留めようとしても「指からすり抜けて街道や塹壕を駆けめぐ」という言葉がある。確かに1930年代を生き、とくに若者は、不況と戦争の不安のなかで、自らの感傷的な運命と自らを超越する大きな運命を交錯させて、そこで決断しなければならなかった。「第六章・資料」のなかの『スペイン戦争史』では、スペイン内戦の両陣営が頼みの綱としたのが「希望を失った連中」であると書かれている。その「連中」はブラジヤックの世代のことだろう。フランソワは「いろいろな不幸を味わった男」として書かれているが、そうした世代を象徴するかのようである。確かにブラジヤックの世代が独特な困難を抱えていたこ

とに間違いはない。しかし、全体への自己消滅的な没入が生み出す恍惚に美と生の高揚を感じ、それに何よりも価値を置き、それこそが人生に意味を与えるという「ファシスト的人間」の原理からすれば、敵対するのはヨーロッパ近代の合理主義である。戦慄的な美と生の経験に何度も立ち返る永劫回帰に幸福の意味を見出すなら、理性がもたらす均質的な時間と空間のなかで効率を求める合理主義はそれの抑圧でしかないからだ。そうだとすれば、近代文明が続く限り、世代を超えてファシズムが現れる可能性が存在することになるだろう。

おわりに

1940年5月10日にドイツ軍が突然ベルギーに侵入し、実戦が始まる。ところが6月に『ジュ・スイ・パルトゥ』の仲間が内通の疑いをかけられ、ブラジヤックはパリ警察に呼び戻される。そのとき、すでにドイツ軍はパリに迫っていた。6月10日、嫌疑を晴らしたブラジヤックが前線に戻る列車に乗ったとき、フランス政府はパリを離れる決定をしていた。6月22日に休戦協定が調印され、3日後に発効した。ブラジヤックの部隊は降伏し武装解除された。彼は尋問を受けた後、ドイツ国内外の捕虜収容所を転々とし、1941年4月1日に釈放された。帰国後、ブラジヤックはドイツ占領下のパリで『ジュ・スイ・パルトゥ』誌の編集長の座に復帰した。同誌はパリ陥落1週間前の1940年6月7日をもって休刊していたが、翌年2月7日に再刊していた。

南祐三氏によれば、『ジュ・スイ・パルトゥ』誌は1930年11月29日の創刊のときからモーラスとアクション・フランセーズに深いかかわりをもっていたが、2代目編集長にピエール・ガクソットが就いてからは極右の旗幟を鮮明にしていた。しかし、1930年代を通して、モーラス思想に忠実でドイツに対して強い警戒心をもつガクソットと、親ドイツ的な方向に次第に向かうようになったブラジヤックやルシアン・ルバテらの若手との間に溝ができるようになっていた。1937年に編集長がブラジヤックに代わり、1940年にガクソットが離脱してからは、親ドイツの傾向は顕著になり、積極的にナチズムを称賛するようになっていた。敗戦後、モーラスの『アクション・フランセーズ』紙は自由地区のリヨンに移ったが、『ジュ・スイ・パルトゥ』誌はモーラスの反対を押し切ってパリに残った。1940～44年の間にパリで刊行された40あまりのプレスのうち戦前から続いたのは、『ジュ・スイ・パルトゥ』誌を含めて9つであり、さらにそれだけが編集者の大幅な入替がなかった。ブラジヤックが編集長に復帰した後、それはヴ

イシー政権を支持する「対独協力者 (collaborateur)」にとどまらず、積極的にナチスに協力する「対独協力主義者 (collaborationniste)」へと歩みを進めた。そして発行部数の増加と過激な言論から、対独協力を代表するプレスへと成長した。しかし、ドイツがスターリングランドと北アフリカで敗北し、ムッソリーニが失脚して逮捕され、戦況が明らかに不利になった1943年8月末、ブラジヤックは親ドイツに邁進する『ジュ・スイ・パルトゥ』誌の仲間と対立し、編集長の職を辞した。ブラジヤックはわずかな希望をペタンに託したが、無駄なことだった。

1944年8月25日にパリが解放される前にフランスのファシストの多くは逃亡したが、ブラジヤックはパリに残り、隠れて生活していた。解放後のパリで臨時政府が設立されると、対独協力者への無慈悲な粛清が始まった。ブラジヤックは母親や親友が身代わりに拘留されたことを聞き、1944年9月14日朝に自首し逮捕された。10月に法廷が組織され、フレーヌ監獄に収監された。翌年1月に裁判が始まり、国家反逆罪の廉で死刑の判決が下された。その間、ブラジヤックはひたすら執筆を続け、手記、戯曲、詩、手紙を書き続けた。死刑囚の獄舎に移されて鎖でつながれても、ブラジヤックは執筆の手を止めなかった。最後に取りかかったのは大革命のときに処刑されたシェニエの評伝であった。フランソワ・モーリヤック、ポール・クロデル、ポール・ヴァレリー、ジョルジュ・デュアメル、ジャン・コクトー、チエリー・ムーニエ、アルベール・カミュなど名だたる59名の知識人が署名した助命嘆願書が臨時政府首班のド・ゴールに出されたが、聞き入れられることはなかった。2月3日、ブラジヤックは手紙のなかで、立場の違いを乗り越えて榮譽を与えてくれたフランス知識人に謝意を表した。2月6日、銃殺刑が執行された。

フランス文学界の重鎮になったアンリ・マシスは、「息子を失ったような悲しみ」のなかで何度も自問し、「われわれ年長者は彼を彼自身の若さから守るべきだった」と書いた。「若さ (la jeunesse)」は「青春」とも訳せる。

【参考文献】

有田英也『政治的ロマン主義の運命——ドリュ・ラ・ロシエルとフランス・ファシズム』名古屋大学出版会、2003年。

ニーチェ（氷上英廣訳）『ツァラトゥストラはこう言った』（上・下）、岩波書店、1967年、1970年。

ニーチェ（秋山英夫訳）『悲劇の誕生』岩波書店、1973年。

深澤民司『フランスにおけるファシズムの形成——ブーランジスムからフェソーまで』岩波書店、1999年。

福田和也『奇妙な廃墟——フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラテール』図書刊行会、1989年。

堀田新五郎「20世紀における「政治と文学」の問題——その革命的性質について」奈良県立大学研究季報

- 22(3), 2012年。
- ポール・ニザン (篠田浩一郎訳) 『アデン・アラビア』晶文社, 1966年。
- 松浦寛「ドリュ・ラ・ロシエルとブラジヤック——文学的ファシズムとは何か」*Les Lettres françaises* 7, 1987年。
- ミシェル・ヴィノック (大嶋厚訳) 『フランス政治危機の100年——パリ・コムユーンから1968年5月まで』吉田書店, 2018年。
- 南祐三『ナチス・ドイツとフランス右翼——パリの週刊誌「ジュ・スイ・パルトゥ」によるコラボレーション』彩流社, 2015年。
- 三保元「あるファシストの誕生——ブラジヤックの場合」中央公論〔歴史と人物〕1972年8月号。
——「あるファシストの青春——ブラジヤックの場合」中央公論〔歴史と人物〕1972年11月号。
- ロベール・ブラジヤック (池部雅英訳) 『七彩』図書刊行会, 1990年。
—— (高井道夫訳) 『われらの戦前・フレーヌ獄中の手記』図書刊行会, 1999年。
—— (高井道夫訳) 『パリの小鳥売り』春風社, 2011年。
- Brasillach, Robert. *Œuvres complètes de Robert Brasillach*, annotée par Maurice Bardèche, 12v., Club de l'honnête homme, 1955-1964.
- Griffin, Roger. *International Fascism: Theories, Causes and the New Consensus*, Oxford University Press, 1998.
- Louvrier, Pascal. *Brasillach: l'illusion fasciste*, Perrin, 1989.
- Massis, Henri. *Le souvenir de Robert Brasillach*, Dynamo, 1963.
- Pellissier, Pierre. *Brasillach ... le maudit*, Denoël, 1989.
- Tucker, William R. *The Fascist Ego: A Political Biography of Robert Brasillach*, University of California Press, 1975.

[付記] 本稿は平成28年度長期国内研究員の研究成果の一部である。